

接触場面における 日本語学習者の聞き返し連鎖についての一考察 —聞き返し連鎖定義の再検討と学習者の使用実態—

許 挺傑

キーワード：接触場面、日本語学習者、聞き返し連鎖、聞き返し連鎖の定義、使用実態

1. 研究背景と目的

日本語学習者は、日本語能力の獲得が不十分なゆえに、接触場面において、母語話者の話が聞き取れない、わからないという問題に遭遇することが多い。日本語教育では、これらの問題を解決するための手段としての聞き返しに注目する研究がある。尾崎による一連の研究（Ozaki1989, 尾崎1992, 1993, 2001など）を始め、学習者の聞き返し使用の実態調査（大野2000, 池田2003, 福富2012など）や、日本語教科書における聞き返しの扱われ方（トムソン木下1994など）、聞き返しの教室指導の効果（椿2011など）など、さまざまな観点からの研究が行われてきた。

接触場面において、聞き取り・意味理解の問題が生じた際には1回の聞き返しだけで全ての問題が解決される場合もあるが、それだけでは全面的な解決ができず、複数回の聞き返しを連続的に使用する場合もある。先行研究の多くは、単体の聞き返し使用に注目しており、複数回の聞き返しを連続的に使用する、いわゆる聞き返し連鎖（尾崎1993）という現象に関しては、部分的な言及をされている研究が数本あるぐらいで、現象全体の解明にはまだ至っていないのが現状である。Miyazaki（2000）にもあるように、接触場面における日本語学習者の聞き返し使用の全容を明らかにするためには、単体の聞き返し使用という側面のみならず、複数回の聞き返しを連続的に使用するという現象にも注目すべきである。

本稿では、まだ十分に解明されていない聞き返し連鎖の現象に焦点を当て、今後の研究のための第1歩として、先行研究にみられる聞き返し連鎖の定義を批判的に再検討し、そのうえで、本稿の分析資料に観察された学習者の聞き返し連鎖の使用実態の一端を示す。

2. 先行研究と本研究の立場

2.1 聞き返しの定義とその分類

聞き返しの定義は、多くの先行研究に引用されている尾崎（1992）に従う。聞き返しとは、相手の話が聞き取れない、わからないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策である。聞き返しの分類は、研究者によって異なるが、尾崎（2001）

は2つの基準を用いている。1つ目は聞き返しが先行発話の全体または一部を繰り返しているかどうかである。繰り返している場合をエコー型、繰り返していない場合を非エコー型と呼ぶ。エコー型には、さらに先行要素を単に繰り返すだけのもの（単純エコー型）と繰り返した後に「分らない」「知らない」などの+ α を付け足すもの（複合エコー型）がある。2つ目の基準は、聞き返しが形式上、確認要求とみなせるかどうかである。例えば、例1の377行目の「銘柄？」という聞き返しに対して、「うん」「ええ」などの肯定表現で応じることができる。このような聞き返しは、確認要求とみなせるため、確認型と呼ばれる。一方、感動詞や応答詞などを用いた聞き返し「うん？」「はい？」などは、上記の肯定表現で応じることができたいため、非確認型と呼ばれる。

例1「好きなビールの銘柄」¹

375. NS2 :=好きな (0.2) ビールの.: (.) ん.:銘柄.

376. (0.8)

377. NNS2:銘柄? ←「単純エコー型 (確認)」

378. NS2 :銘柄.

379. (1.0)

380. NNS2:あん: (.) 好きなビールの名前ですか? ←「言い換え型」

381. NS2 :うん.

382. NNS2: .hh ん:[:やはり (0.2) キリン.

そして上記の2つの分類基準を組み合わせると4種類の「聞き返し」を区別することができる。それらは、1) 単純エコー型 (エコー・確認)、2) 複合エコー型 (エコー・非確認)、3) 確認型 (非エコー・確認型)、4) 非確認型 (非エコー・非確認型) である。

尾崎 (2001) の分類基準は①話し手による聞き返し発話の組み立て方の違い、②聞き返しに対する聞き手の反応の違い、この2点を同時に取り入れている点が特徴的である。

しかし、本稿のデータを観察したところ、尾崎 (2001) の分類では十分にカバーできない聞き返しが存在することが明らかとなった。そこで、本稿では、尾崎 (2001) の分類をもとに、独自の修正を行った。

例えば、「単純エコー型」は、すべて確認型であると述べられているが、本稿のデータでは、例1の377行目「銘柄？」のように、先行発話の一部を正確にエコーしている場合と、例2の320行目「すっべた？」のように、先行発話の一部を間違った形、あるいは不完全な形でエコーしている場合がある。この2種類は、先行発話の一部を単に繰り返している点では、両方とも「単純エコー型」である。しかし、尾崎 (2001) の分類基準にも用いられている「聞き返しに対する聞き手の反応の違い」という点から見ると、両者に対する聞き手の反応に異なる点があるように思える。例1の377行目「銘柄？」に対し、聞き手が「うん」「ええ」などの肯定表現で応じることが可能である。一方、例2の320行目の「すっべた？」のように、先行発話の一部を間違った形でエコーしている場合に対し、上記の「う

¹文字化の方法は本稿末尾の「文字化の方法」を参照されたい。

ん」「ええ」などの肯定表現で応じることはできず、間違った部分を何らかの方法で訂正するのが普通ではないかと思われる。そこで本稿ではこの 2 種類の「単純エコー型」を区別することにする²。それぞれを「単純エコー型（確認）」と「単純エコー型（訂正）」と暫定的に名付けておく。「単純エコー型」は話し手による聞き返しの組み立て方の特徴を示しており、（確認）と（訂正）は、聞き返しをされた側が行う反応の種類を意味している³。

例 2 「酢豚の説明」

317. NS1 : パイナップルっていうのは、あのう、[酢豚ってあるでしょう、

318. NNS1: [° うん°

319. (0.6)

320. NNS1: すった? ← 「単純エコー型（訂正）」

321. NS1 : す::ぶ::た::

322. NNS1: ° す::ぶ::た::° ← 「単純エコー型（確認）」

323. NS1 : ° す::ぶ::た::°

324. (1.4)

325. NNS1: ° わからない。° ← 「その他型」

326. NS1 : 酢豚って、あの中国料理で:

また、尾崎（2001）では、「複合エコー型」について、「確認型」（例：エコー+ですか？）と非確認型（例：エコー+何ですか？）がありうるとしつつも、資料では、複合エコー型はすべて非確認型だったと述べている。

しかし、本稿のデータを観察した結果、わずか 2 例⁴であるが、例 3 の 545 行目の「私今？」のような複合エコー型の「確認型」も観察された。このような聞き返しは、形式上、確認要求の発話形式となっているため、複合エコー型（確認）と呼ぶことにする。また、複合エコー型の「非確認型」には、+αの性質によって下位分類できることが分かった。例えば、例 4 の 193 行目の「°じんぎよとは°なんですか？」のような聞き返しは、+αの発話形式が「～は何ですか」のように、説明を求める発話形式であるため、このようなものは、「複合エコー型（説明）」と呼ぶことにする。一方、同じ例の 195 行目の「難しい何？」という聞き返しは、「は」や「って」のような提題表現がないことから、「難しい」の「意味説明」ではなく、その後ろの部分の繰り返しが求められている発話形式となっている⁵ため、このようなものは、「複合エコー型（繰り返し）」と呼ぶことにする。

例 3 「昔の友人が住んでいた学校の寮」

²名付けの仕方こそ異なるが、先行研究でもこの 2 種類の聞き返시를明示的に区別しているものが見られる（大野 2000, 徳永 2000 など）。詳細はそれぞれの文献を参照されたいが、一例を挙げると例えば、徳永（2000）は、「銘柄？」のようなものを「反復（上昇調）マーカ」とし、「すった？」のようなものを、NS の発話のうち、聞き取れた音のみ真似をして発するもので、「発音模倣マーカ」としている。

³しかし、このことは必ずしも、この 2 種類の聞き返しがそれぞれ聞き手に「確認」することだけ、「訂正」することだけを要求していることを意味しているとは限らない。

⁴もう 1 例は例 9 の 303 行目である。

⁵例 3 の 547 行目も同じような発話形式である。

542. NS1 :前は友達が住んでたけど=今は住んでいない。

543. (0.4)

544. NS1 :° だよな, あそこ.°

545. NNS2:私今? ←「複合エコー型 (確認)」

546. (0.4)

547. NNS2:今:: (1.4) 何? ←「複合エコー型 (繰り返し)」

548. NS1 :うん?あ->違う違うく, ま-前, あのう僕の友達が:寮にすん-住んでたんだけど,

例4「難しい授業ある?」

190. NS1 :ほかに (2.4) 難しい(.) ta やつとかある?=難しいじぎょうとか。

191. NNS1:° じぎょうと° ←「単純エコー型 (訂正)」

192. NS1 :うん?

193. NNS1:° じぎょうとは:° なんですか? ←「複合エコー型 (説明)」

194. NS1 :せいよ?

195. NNS1:° sei° 難しい何? ←「複合エコー型 (繰り返し)」

196. NS1 :難しい:あのう (1.0) mi じぎょうとか i ある?=ほか。

197. NNS1:ほか suu,° ほか° (2.0) あまり。

最後に、尾崎 (2001) では「非エコー型」には「確認型」と「非確認型」があるとしているが、本稿では、「非エコー型」に関しては、先行発話の一部を自分の言葉で言い換えて聞き返す場合 (例1の380行目「好きなビールの名前ですか?」)、感動詞や応答詞などを用いる場合 (例5の454行目「え?」) と、先行発話に対して、「わからない」 (例2の325行目「わからない」) をいう場合などが観察された。

例5「夜寝るのも早い?」

453. NS1 :で夜寝るのもはやい?

454. NNS1:え? ←「感動詞型」

455. NS1 :よ夜も早く寝る?

例1の380行目「好きなビールの名前ですか?」のような聞き返しは、「非エコー型 (確認)」とすることは特に問題は生じないが、例5の454行目「え?」のような聞き返しと、例2の325行目「わからない」のような聞き返しは、一括りで「非エコー型 (非確認)」とすると問題が生じてしまう。「え?」に対して、先行発話の説明を行うことで応じることは不可能ではないが、先行発話の反復を求めているとの解釈がより自然ではないと思われる。一方で、「わからない」に対して、先行発話の繰り返しを行うことで応じることは不可能ではないが、先行発話の説明を求めているとの解釈がより自然ではないと思われる。つまり、後二者は、それぞれに対する聞き手の反応に差異が存在しうるため、両者を一括りにしてしまうと現象の詳細な記述に支障をきたす恐れがあるため、本稿では、非エコー型に3つのタイプを認め、それぞれを「言い換え型」「感動詞型」「その他型」と呼ぶことにする。上記をまとめると、次のようになる。

エコー型 : 単純エコー型 (確認)、単純エコー型 (訂正)
複合エコー型 (確認)、複合エコー型 (繰り返し)、複合エコー型 (説明)
非エコー型 : 感動詞型、言い換え型、その他型

2.2 聞き返し連鎖の先行研究と本稿の立場

日本語教育における聞き返しの研究で、聞き返し連鎖を分析の対象に入れている研究は、単体の聞き返し使用の研究と比べて数は少ないものの、尾崎 (1993)、Miyazaki (2000)、佐々木 (2006)、モンルタイ (2006)、林 (2007) などがある。ここではこれらの研究を概観した上で、本研究における聞き返し連鎖の定義と分析範囲を示す。

尾崎 (1993) は、聞き返しとそれに対する応答からなる発話のやり取りを「聞き返しの発話交換」と呼び、聞き返しの発話交換が連続するものを「聞き返し連鎖」と定義している。だが、尾崎 (1993) は聞き返し連鎖そのものに焦点を当てているわけではなく、聞き返し使用の成功率を分析するための手段として導入している。聞き返しの発話交換によって聴解問題が解消されたかどうかは簡単に判断できないが、聞き返しの発話交換が 2 回続けて起これば、1 回目の発話交換は聴解問題を解消するという点では、不成功だったと断定していいだろう (尾崎 1993 : 24) と述べている。

尾崎 (1993) に見られる聞き返し連鎖の捉え方を踏襲し、さらに、聞き返し連鎖の生起要因を明らかにしようとする研究としてはモンルタイ (2006) と林 (2007) が挙げられる。

モンルタイ (2006) は、学習者の聞き返し連鎖が起きる原因として①学習者の聞き返しの発話意図が日本人に伝わらなかったため、②意図は伝わったが、聞き返しに対する日本人の応答が理解できなかったため、③意図が伝わり、学習者自ら更なる確認を行ったため、の 3 つがあると述べている。林 (2007) は、聞き返しの生成プロセスに焦点を当てている。その中で、聞き返し連鎖に関しては、話し手自身が実施した聞き返しを否定的に評価し、調整計画を変更することによって起きている場合があると報告している。

一方、尾崎 (1993) に見られる聞き返し連鎖に対する捉え方を批判する研究もある。佐々木 (2006) は聞き返しの発話交換が 2 回以上続いていた場合でも内容理解の問題が解決されていることを重要視して分析すべきだとしている。

Miyazaki (2000) は、オーストラリアのモナシュ大学の日本語学習者 34 名を対象に、言語能力の差異という観点から、学習者の聞き返し使用を分析している。連鎖に関しては、言語能力の高い学習者ほど連鎖の例が少ないものの、問題の発生から問題の解決までのターンの数が比較的多いことや、学習者の聞き返し連鎖は母語話者のそれと比べて形式が単純で、そのほとんどが「反復・説明要求」から開始し、「説明要求」で終了していることなどを報告している。

上記の先行研究は、聞き返しのみならず、聞き返し連鎖の存在を指摘し、その特徴の一部について言及している点で評価できるが、次のような問題があるように思われる。

先行研究の多くが、聞き返し連鎖そのものを研究対象としていないためか、聞き返し連

鎖の定義がきちんと検討されていないまま、議論が展開されているように思える。

確かに尾崎（1993）では聞き返し連鎖の定義づけを行っているが、しかしそれは聞き返し連鎖そのものにどのような特徴があるかを分析するためというより、学習者の聞き返し使用の成功率を算出するためであった。聞き返しとそれに対する応答からなる発話を「聞き返しの発話交換」と呼び、聞き返しの発話交換が連続するものを「聞き返し連鎖」とするという定義は、連鎖の基本的な特徴を捉えている点では評価できるが、複数回の聞き返しの発話交換が連続している場合、それぞれの聞き返しが先行発話のどの箇所に対して行われたかという観点から見ると質の異なる連鎖が数多く観察されることから、聞き返し連鎖の中身についてさらに議論する必要があると考える。

また、Miyazaki（2000）では、「聞き返し連鎖」という言葉こそ使用していないが、複数回の聞き返しの連続的な使用を complex adjustment と呼んでいる。そして、それは、「聞き返しが連鎖的（sequentially expanded）に使用され、それによって意味交渉が拡張されるもの」を指し示すと述べている。この定義は、尾崎（1993）の定義と比べて抽象的ではあるが、聞き返し連鎖の特徴として、①聞き返しが連鎖的に使用されていること、②それによって意味交渉が拡張されること、の2つに注目している点で意義がある。しかし、この定義も聞き返し連鎖の特徴の一部を捉えているものの、上記の尾崎（1993）の定義と同じように、会話の流れの中で、複数回の聞き返しが連続的に使用されることに重きを置いたものであるため、その複数回の聞き返しがそれぞれ先行発話のどの箇所に対して行われたものかに関しては、明示的に示されていないのである。

以下では、聞き返し連鎖を分析する際に、複数回の聞き返しが連鎖的、あるいは連鎖的に利用されているという点以外に、それぞれの聞き返しが先行発話のどの箇所の問題に対して行われたかという点から見ることによって、これまで同質として扱われてきた連鎖の中にも質の異なるタイプの聞き返し連鎖があることを示す。そのうえで、本稿の立場を示したい。まず、次の例を見られたい。

例6「好きなビールの銘柄」（例1の再掲）

383. NS2 :=好きな (0.2) ビールのの:: (.) ん::銘柄.

384. (0.8)

385. NNS2:銘柄? ←「単純エコー型(確認)」

386. NS2 :銘柄.

387. (1.0)

388. NNS2:あん:(.)好きなビールの名前ですか? ←「言い換え型」

389. NS2 :うん.

390. NNS2: .hh ん::やはり (0.2) キリン.

尾崎（1993）の定義に従えば、385行目と386行目が1つ目の聞き返し発話交換となり、388行目と389行目は2つ目の聞き返し発話交換となる。そして、この2つの聞き返し発話交換が連続しているため、ここでは2つの聞き返し発話交換からなる1つの聞き返し連

鎖が観察されるということになる。また、この例では2つの聞き返しはともに、「銘柄」という箇所に対する聞き返しであることも確認できる。これに対し、例7はどうか。

例7「中国のお正月の爆竹の話」

323. NS2 :あと:爆竹を.
324. NNS1:ばくちく? ←「単純エコー型(確認)」
325. NS2 :爆竹
326. NNS1:ん::,
327. (0.6)
328. NS2 :あのう,お正月に中国では:
329. NNS1:°はい.°
330. NS2 :外で爆竹?
331. NNS1:ばくちく:= ←「単純エコー型(確認)」
332. NS2 :=火薬
333. NNS1:°はい.°
334. NS2 :を:こう:: (0.4)だからこうばんばん,
335. (1.4)
336. NNS1:°こばんばん°? ←「単純エコー型(訂正)」

この例では、3回の聞き返しが使用されているが、例6と比べて聞き返しがどの箇所の問題に対するものかという観点から見ると、1回目(324行目)と2回目(331行目)は、「爆竹」に対するものであるのに対し、3回目(336行目)は、334行目の「こうばんばん」という箇所に対するものである。

複数回の聞き返しが連続的に利用されていることに重きを置いた尾崎(1993)とMiyazaki(2000)の定義によれば、例7は3回の聞き返し発話交換からなる1回の聞き返し連鎖であると認定されよう。しかし、例7の3回の聞き返しの連続使用は、問題の箇所が異なるという点で例6と違いが見られる。また、次の例も見られたい。

例8⁶「妹さんが卒業したら」

- 1 NS:妹さんは一卒業したらどうするのかな↑
→2 FS:妹↑
⇒3 NS:うん、やっぱりマレーシアへ帰りますか↑
→4 FS:あ、ことし↑
⇒5 NS:うん卒業したら↓

この例では2行目と3行目で1つ目の聞き返し発話交換をなしており、4行目と5行目で2つ目の聞き返し発話交換をなしている。そして、尾崎(1993)は、これも聞き返しの連鎖の例として分析している。

⁶この例は尾崎(1993)から引用したものである。表記は尾崎(1993)のままにしている。NSは日本語母語話者で、FSは日本語学習者。

しかし、それぞれの聞き返しが先行発話のどの箇所に対して行われたかという観点から見ると、例 8 は、上記の例 6、7 と異なることがわかる。

例 6 は、2 つの聞き返しともに「銘柄」という箇所に対する聞き返しであるのに対して、例 7 では、最初の 2 つは「爆竹」という箇所に、3 つ目は「爆竹」の説明にある「こうばんばん」という新たな問題箇所に対して行われたものである。そして、例 8 では、2 行目の聞き返しは、1 行目の「妹さん」という箇所に対して、4 行目の聞き返しは、1 行目の「卒業したら」という時間を示す箇所に対して、行われたものである。つまり、例 8 では、FS にとって、最初の 1 行目の発話に 2 箇所の問題があり、その 2 箇所に対して、別々の、かつ質の異なる聞き返しを行っているのである。

尾崎 (1993) や Miyazaki (2000) の定義に従うと上記の例 6、7、8 は、すべて同じ質の聞き返し連鎖として分析されることになるであろう。しかし、今見た通り、3 つの例は複数回の聞き返しがそれぞれ先行発話のどの箇所の問題に対して行われたかという観点から見ると、幾らか質が異なる点があることがわかる。

単体の聞き返し使用と比べ、会話の中で、複数回の聞き返しを連続的に使用しなければならない場面というのは、さまざまな要素が複雑に絡んでおり、かなり複雑な現象であると思われる。また、1 つの問題に対する複数回の聞き返しの連続使用と比べ、問題そのものも複数あり、それぞれの問題に対してさらに複数回の聞き返しを連続的に使用する場合は複雑さの度合いは増してくるであろう。複雑な現象をきちんと選別せずに、形式的な基準で分析してしまうと、中身についての正確な記述が得られない恐れがあると考えられる。

そこで、筆者は複雑な現象の中から、まずは比較的にわかりやすい現象を取り上げてそこから解明していくことを提案したいと考える。具体的には、まず例 6 のような、同一箇所に対する複数回の聞き返しの連続使用を分析対象とし、その特徴を明らかにしたうえで、より複雑であろうと思われる他のタイプの聞き返し連鎖を分析していく。そして、質の異なるタイプの聞き返し連鎖にそれぞれどのような特徴があるかを総合的に比較検討することで、接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖の使用の全容を明らかにすることができるのではないかと考える⁷。

以上を踏まえて、本稿では例 6 のような同じ箇所に対する聞き返し連鎖の連続使用を聞き返し連鎖とする。例 7 のような場合は、最初の 2 つ目までの聞き返しの連続使用を聞き返し連鎖とし、3 つ目の聞き返しは連鎖として含めない。また、例 8 のような複数箇所の問題に対する聞き返しの連続使用も今回の分析対象としない。尾崎 (1993) に見られる聞き返し連鎖の定義そのものは、連鎖の基本的な特徴を捉えている点で評価できるが、どの箇所に対して行われた聞き返しかという観点から見ると、聞き返し連鎖には質の異なるタイプがあるため、それらについてきちんと認識すべきであると考えられる。

⁷尾崎 (1993) に見られる聞き返し連鎖に対する捉え方も、質の異なる聞き返し連鎖のそれぞれの特徴を分析したうえで、再検討する必要があるのではないかとと思われる。ここではこの問題について論じる余裕がないため、今後の課題とする。

3. 調査対象者と分析資料

本研究で分析するのは3名の学習者（NNS1、NNS2、NNS3）の発話である。全員2008年の4月に留学目的で初来日している。NNS1（女性）とNNS2（女性）は、中国の同じ大学で日本語を専攻しており、NNS1（4年次）はNNS2（3年次）の1年先輩である。来日時には2人とも日本語能力試験の2級レベルであった。NNS3（男性）は日本語専攻の学生ではないが、民間の日本語学校に通ったり、独学したりして来日時には6年間の日本語学習歴があり、日本語能力試験の1級にも比較的高い点数で合格している。2級保持者の2人は来日した年の12月に日本語能力試験の1級を受けたが、NNS2が合格し、NNS1が不合格であったという。上記を総合的に判断すると、日本語能力の高い順はNNS3、NNS2、NNS1となる。

会話の相手となる日本人（男性、NS1とNS2）は、3人の留学先の大学生で、英語を専攻している。中国語にも興味を持っているが、体系的に中国語を習ったことはない。会話の収録は、2008年の5月から開始し、7月、9月、11月、翌年の1月までそれぞれ5回⁸行われた。自然談話における学習者の聞き返し使用を観察するのが目的であるため、特に話題は指定せず、「20分ほど自由に喋ってください」という指示のみを出した。1回20分ほどの2者間会話を14回収録した（総時間数289分19秒、約5時間分）。また、なるべく直前の回と違う組み合わせとなるように心がけたが、参加者の都合で連続して同じ人と話すこともあった。話された話題は大学の授業や先生、普段の生活、日本の習慣、中華料理、観光など、大部分が身近な話題であった。録音した全ての会話を分析の材料とした。縦断的なデータではあるが、時間の経過による聞き返し使用の変化は、本稿の目的から離れるため、ここでは詳述しない。本稿では、これまでの聞き返しに関する研究においてあまり注目されてこなかった聞き返し連鎖に焦点を当て、1つのケーススタディーとして、およそ5時間分の会話データに見られた37例の聞き返し連鎖の実例を分析する。

4. 結果と考察

4.1 聞き返し連鎖の全体的な特徴

聞き返し連鎖の特徴を見る前に、まず今回の談話資料に見られた聞き返しの総数などについて概観しておく。およそ5時間分の会話データに見られた3人の学習者の聞き返し総数は194回、NNS1、NNS2、NNS3、それぞれ89回、66回、39回であった。194回のうち、連鎖内で使用された聞き返しの数は87回で、全体の45.4%を占めている。つまり、1回の聞き返しのみで問題解決ができた例が5割強あるが、1回の聞き返しだけでは全面的な解決ができず、聞き返し連鎖になり、連鎖内で使用されている聞き返しの数も5割近くあるということである。このことは、学習者の聞き返しの使用の全容を明らかにするためには、単体の聞き返し使用の観察だけでは不十分であることを表している。

⁸それぞれ5回の会話を収録する予定であったが、NNS3が最後の収録の前に、緊急帰国したため、NNS3のみ、4回分である。

以下では、学習者の聞き返し連鎖の特徴を観察する。聞き返し連鎖内において、2回以上の聞き返しが使用されるが、それぞれどのような聞き返しが使用されているか、1つの連鎖内に何回の聞き返しがあつたかなどの観点から聞き返し連鎖の特徴をまとめた（表1）。

【表1】聞き返し連鎖の回数とパターン

連鎖内部	1回目	2回目	3回目	4回目	計
NNS1 (17回の連鎖)					
NNS1①	単純 (訂正)	単純 (確認)			1
NNS1②	単純 (訂正)	単純 (訂正)			1
NNS1③	単純 (訂正)	単純 (確認)	単純 (確認)		1
NNS1④	単純 (訂正)	単純 (確認)	その他		1
NNS1⑤	単純 (確認)	単純 (確認)			4
NNS1⑥	単純 (確認)	感動詞 + 言い換え ⁹			1
NNS1⑦	単純 (確認)	単純 (確認)	単純 (確認)		1
NNS1⑧	単純 (確認)	単純 (確認)	単純 (訂正)		1
NNS1⑨	単純 (確認)	複合 (説明)	複合 (繰り返し)		1
NNS1⑩	単純 (確認)	複合 (確認)	単純 (確認)		1
NNS1⑪	単純 (確認)	単純 (確認)	単純 (確認)	単純 (確認)	1
NNS1⑫	感動詞	その他			1
NNS1⑬	感動詞	単純 (確認)			1
NNS1⑭	感動詞	単純 (訂正)			1
NNS2 (10回の連鎖)					
NNS2①	単純 (訂正)	単純 (訂正)			1
NNS2②	単純 (訂正)	複合 (説明)			1
NNS2③	単純 (訂正)	複合 (説明) + 言い換え			1
NNS2④	単純 (訂正)	単純 (訂正)	単純 (訂正)		1
NNS2⑤	単純 (訂正)	単純 (確認)			1
NNS2⑥	単純 (確認)	単純 (確認)			1
NNS2⑦	単純 (確認)	言い換え			2
NNS2⑧	単純 (確認)	その他			1
NNS2⑨	複合 (確認)	複合 (繰り返し)			1
NNS3 (10回の連鎖)					
NNS3①	単純 (訂正)	単純 (訂正)			1
NNS3②	単純 (訂正)	単純 (確認)			1
NNS3③	単純 (訂正)	その他			1
NNS3④	単純 (訂正)	単純 (確認)	単純 (確認)		1
NNS3⑤	単純 (確認)	単純 (確認)	言い換え		1
NNS3⑥	単純 (確認)	言い換え			3
NNS3⑦	感動詞	単純 (確認)			2

表1を見ると、3人の中で日本語能力が一番低く、聞き返しの使用回数も一番多かったNNS1が、聞き返し連鎖の回数（17回）も多いのに対し、日本語能力の高いNNS3や日本

⁹これはNNSの1つの発話に2つの聞き返しがある場合である。

語能力が大きく上達した NNS2 は連鎖の回数（2 人とも 10 回の連鎖）や種類も比較的少ないことがわかる。さらに、NNS1 と比べ、NNS2 と NNS3 は 2 回の聞き返しの使用で問題解決につながるケースが多いのに対し、NNS1 は 3 回の聞き返しを使用して初めて問題解決につながるケースが 6 例もあり、全体の 3 割以上になる。中には、4 回の聞き返しを使用して初めて問題解決につながる例もあった。一般化をするためにはデータ量を増やす必要があるが、本稿のデータを観察した限りでは、日本語能力の高い学習者は連鎖が生じて、2 回の聞き返して問題解決につながる人が多いのに対し、日本語能力の低い学習者はその交渉は長くなる傾向があるようである。このことは、言語能力の低い学習者が 1 回の聞き返しだけで問題解決できず、複数回の聞き返しを利用しなければならない時も、効率的な聞き返しを利用できないということを意味しているのではないかと考えられる。

Miyazaki (2000) では、日本語能力の高い学習者は、連鎖の例は少ないものの、問題の発生から問題の解決までのターンの数は比較的多いことを報告している。単純比較はできないが、日本語能力の高い学習者は連鎖の例が少ないという点で本稿と一致しているが、問題の発生から問題の解決までのターンの数は比較的多いという点では異なっている。この点は、2 節で述べた両研究で用いられている聞き返し連鎖の認定基準の違いが要因の 1 つとして考えられる。本稿の場合、質の異なるタイプの聞き返し連鎖を排除し、同一箇所にある問題に対する複数回の聞き返しの連続使用のみを研究対象としているが、Miyazaki (2000) の研究は、挙げられた例を見る限りでは、例 6 のような聞き返し連鎖のみならず、例 7 のような例も、聞き返し連鎖として分析されている。学習者の言語能力と聞き返し連鎖の長さという両者の相関関係を考える際に、質の異なる聞き返し連鎖も混ざっていれば、そもそも聞き返し連鎖には質の異なるタイプがあるという要因を十分に排除できていないことになる。この点は、分析の結果にまで影響を及ぼしかねない。

4.2 聞き返し連鎖の開始と終了

この節では、さらに、表 1 をもとに、3 人の聞き返し連鎖がどのような聞き返しの使用で開始され、どのような聞き返しの使用で終了されているかという観点から観察する（表 2）。

【表 2】聞き返し連鎖の開始と終了

	開始	回数	割合	終了	回数	割合
NNS1 17 例の連鎖	単純（訂正）	4	23.5%	複合（繰り返し）	1	5.9%
	単純（確認）	10	58.8%	単純（訂正）	3	17.6%
	感動詞	3	17.6%	単純（確認）	10	58.8%
				その他	2	11.8%
				言い換え	1	5.9%
NNS2 10 例の連鎖	単純（訂正）	5	50.0%	単純（訂正）	2	20.0%
	単純（確認）	4	40.0%	単純（確認）	2	20.0%
	複合（確認）	1	10.0%	複合（説明）	1	10.0%
				言い換え	3	30.0%

				その他	1	10.0%
				複合（繰り返し）	1	10.0%
NNS3 10 例の連鎖	単純（訂正）	4	40.0%	単純（訂正）	1	10.0%
	単純（確認）	4	40.0%	単純（確認）	4	40.0%
	感動詞	2	20.0%	その他	1	10.0%
				言い換え	4	40.0%

表 2 を見るとわかるように、連鎖の開始において、3 人とも「単純エコー型（訂正・確認）」を多用しているが、連鎖の終了においては相違点が見られた。NNS1 は連鎖の終了においても、「単純エコー型（訂正・確認）」に頼っており、使用率が 76.5% にもなる。一方、NNS2 と NNS3 は、「単純エコー型（訂正・確認）」の使用がそれぞれ 40.0% と 50.0% にとどまっており、「言い換え型」の使用も多く見られる。連鎖の終了において、NNS1 は「言い換え型」を 1 回しか使用していないのに対し、NNS2 と NNS3 はそれぞれ 3 回と 4 回である。

Miyazaki (2000) では、学習者の聞き返し連鎖は、母語話者のそれと比べると、形式が単純で、そのほとんどが、「反復・説明要求」から開始し、「説明要求」で終了していることを報告している。なお、Miyazaki (2000) でいう「反復・説明要求」と「説明要求」は、挙げられた例を見る限りでは、それぞれ本稿の「単純エコー型（確認）」と「複合エコー型（説明）」に相当するようなので、本稿の結果と比べると、連鎖の開始では、「単純エコー型」が多用されている点で共通しているが、連鎖の終了では、異なっていることになる。本稿のデータでは、連鎖の終了においては「複合エコー型（説明）」の使用が NNS2 の 1 回しかなく、3 人の中で比較的言語能力の低い学習者 NNS1 は「単純エコー型（訂正・確認）」を多用しているし、比較的言語能力の高い学習者 NNS2 と NNS3 は「単純エコー型（訂正・確認）」を 5 割ほど利用していると同時に、「言い換え型」の使用も多くみられる。

Miyazaki (2000) とは聞き返し連鎖の認定基準が異なっているため、単純比較はできないが、上記を観察した限りでは、どうやら、連鎖の終了において、「複合エコー型（説明）」、「単純エコー型（訂正・確認）」、「言い換え型」のどれを多用するかという点で相違があるようである。特に、本稿のデータのみ注目すると「言い換え型」をうまく利用できるかどうか連鎖の終わり方にも影響するようである。「単純エコー型」と比べ、「言い換え型」は、先行発話に対するある程度の理解とその理解を自分の言葉で言い換える能力が必要であるため、より高度な聞き返しである。この点は本稿のデータで観察された連鎖終了における相違点をもたらした 1 つの要因であると思われる。以下に NNS1 の例を挙げる。

例 9 「英語得意ですか」

298. NS1 : 英語:(.)は得意ですか?

299. NNS1: su とくい? ←単純エコー型(確認)

300. NS1 : うん.

301. (1. 0)

302. NS1 : 英語.

303. NNS1: 英語(0. 4)私? ←複合エコー型(確認)

304. NS1 : うん.

305. (2. 0)

306. NNS1: 英語, とくい? ¥(toka なんかなんか) ¥hhh. ←単純エコー型(確認)

307. NS1 : いや::ええとね(.)え=英語は好きですか?

308. NNS1: あ:::す-すき.

単なる聞き取りの問題に対し、「単純エコー型」を用いて、聞き取りの確認を行うことで連鎖を終了させる場合は特に問題はないであろうが、例9のように、明らかにNNS1にとって、「得意」という言葉の意味理解の問題が生じている場合でも、「単純エコー型(確認)」を連続的に利用するのは、円滑なコミュニケーションの妨げとなり得る。この点は、2.1節で挙げた例1(NNS2の例)が「言い換え型」を用いて速やかに問題を解決しているのと同照的である。

5. まとめと今後の課題

本稿では、今まで十分に検討されてこなかった聞き返し連鎖という現象に焦点を当て、先行研究に見られる聞き返し連鎖の定義を、事例の分析を通して、批判的に検討し、聞き返しの発話交換が連続している場合に、複数回の聞き返しがそれぞれの箇所の問題に対して行われたものかという観点から見ると、質の異なるタイプの聞き返し連鎖が存在することを示した。そのうえで、日本語学習者の聞き返し連鎖という現象の全容解明のために、まず同一箇所にある問題に対する複数回の聞き返しの連続使用という比較的シンプルな現象からアプローチすべきだという提案を行った。

さらに、本稿で示した定義をもとに、接触場面における3人の日本語学習者のおよそ5時間分の会話データに観察された37例の聞き返し連鎖の実例の分析を行った。その結果、日本語能力の低い学習者は、比較的長い連鎖を形成しやすく、連鎖をいかに終了させるという点でも、日本語能力の低い学習者は、ほとんど「単純エコー型(訂正・確認)」を用いるのに対し、日本語能力の高い学習者は、「言い換え型」も多用するという違いが見られた。データ数が少ないため、このデータ分析で得られた結論が一般化につながるかどうかは、今後、データを増やして慎重に検討しなければならないが、観察された範囲内のことが事実であれば、いかに効率的に聞き返し連鎖を終了させ、もとのコミュニケーションに戻るかという点に関して、実際の教育場面においても、検討しなければならない課題となるであろう。小論がこの点へ教育的な関心のきっかけとなれば幸いである。

今後の課題としては、より多くのデータを用いて、本稿の結論の検証を行い、本稿で分析できなかった他のタイプの聞き返し連鎖についての分析も行うことにより、接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖という現象のより全面的な実態解明に努めていきたい。

【参考文献】

池田伸子(2003)「ビジネス会話における「聞き返し」戦略の使用傾向—ビジネス日本語

- 教育用教材開発の基礎として一『広島大学留学生センター紀要』13号, pp.37-45.
- 大野陽子(2000)「日本語学習者が使用する「聞き返し」のコミュニケーション・ストラテジー——初級後半から中級後半までのインタビューを基に一『南山日本語教育』7号, pp.151-194.
- 尾崎明人(1992)「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」カッケンブッシュ他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会, pp.251-263.
- 尾崎明人(1993)「接触場面の訂正ストラテジー——「聞き返し」の発話交換をめぐって一『日本語教育』81号, pp.19-30.
- 尾崎明人(2001)「接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略」『社会言語科学』4巻1号, pp.81-90.
- 佐々木隼人(2006)「「聞き返し」についての一考察——過程的・二構造の観点から一『外国語学研究』7号, pp.93-101.
- 椿由紀子(2011)「コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」教育——実際場面で使用できる「聞き返し」をめざして一『日本語教育』147号, pp.97-111.
- 徳永あかね(2000)「接触場面における意味交渉での母語話者の発話—pushdownに注目した分析の試み—」『接触場面の言語管理研究』1号, pp.25-34.
- トムソン木下千尋(1994)「初級日本語教科書と「聞き返し」のストラテジー」『世界の日本語教育』4号, pp.31-43.
- 福富(堀内) 奈美(2012)「接触場面の日本語会話における「聞き返し」——どのような「聞き返し」が効果的なストラテジーと言えるか—」『四天王寺大学紀要』53号, 275-290.
- 林里香(2007)「接触場面における「聞き返し」調整計画についての一考察」『千葉大学人文社会科学』14号, pp.98-111.
- モンルタイ, テンチャローン(2006)「接触場面における初級日本語学習者の聞き返しの連鎖について—JSL タイ語母語話者学習者の場合—」『社会言語科学会第18回大会発表論文集』pp.20-23.
- Miyazaki, Satoshi(2000)Communicative Adjustment and Adjustment Marker : The Point of Request for Clarification 『第二言語としての日本語の習得研究』3号, pp.57-93.
- Ozaki, Akito(1989)*Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non-Japanese*. Canberra : The Australian National University.

【文字化の方法】

[、2人が同時に話し始めたことを示す。(.)、0.2秒以下の短い間合いを示す。言葉∷、直前の音が伸ばされていることを示す。言-、言葉が不完全なまま途切れていることを示す。言葉、音が強いことを示す。h、呼気音を示す。、語尾の音が下がって区切りが付いたことを示す。∞、音が小さいことを示す。=、2つの発話が途切れなく密着していることを示す。><、発話のスピードが目立って速くなることを示す。(h)、笑いながら発話を行うことを示す。ローマ字、日本語にないと思われる音を示す。?、直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。、直前部分が継続を示す抑揚で発話されていることを示す。